世田谷村日記

石山修武

四月二一日（土）

北海道十勝。

ヘレンケラー記念塔現場。帯広空港に倉本檜垣が迎えてくれる。二ヶ月ぶりに十勝にやったスタッフと会う。

十勝連峰には雪があるが、北海道にも春がやってきている。一ヶ月程工程が遅れているが、この塔は期待通り良い物になるのを確信した。プロポーション、スケール全てに狂いが無い。考えていた通りのモノになっている。五層の内部も完全に把握した。色々と嫌なことや、不安があっても、こんな時には建築やってて良かったナと心から思う。

私の処女作である「幻庵」を完全に乗り越えられるだろう。小品ではあるが、私のベストにもなるだろう。庭というか、幌尻岳に面した林の中の道の計画をキチンとしなくてはならない。小さくてしなやかなのが時代の風に吹きさらされているのが良い。

ツリーハウス、ヘレンケラー記念塔、ひろしまハウス、星の子愛児園、聖徳寺霊園と、一つの流れが出現してきたのも頼もしい。

来週から、台湾中原大学、ヨーロッパでのレクチャーなどハードなスケジュールに突入するので、少し休息が必要だ。というわけで、帯広駅前のホテルで昼寝を決め込んだ。忙中閑。

先程、ヘレンケラー塔の中を足場頼りによじ登ったが、普段使わぬ筋肉を使って、体の一部が眼覚めた感がある。空間とは異る身体的な何かを主題にした建築であることを確認できた。モダーンデザインは視覚に頼り過ぎたきらいがある。このシリーズではそれを治療している。

帯広駅前の風景は実につまらぬもので、何処の小都市にもあるくたびれた感じが、新しくできたばかりなのに漂よっている。少し年をとって、色んな体験をして、旅というのが私の中で日常になってしまったのだろう。移動という事の中に新鮮さが視えない。世田谷村でジッとしている方が新鮮なのだ。我ながらオカシイ。

四月二十二日　日

昨夜は北海点字図書館の後藤氏等と会食。偶然ではあったが、塔の職人さん達や仁科建設の社長さん達と一緒だったので楽しかった。職人は良い。やはり商人とはちがう気質がある。何処のソバがうまいかで大騒ぎをした。

実ワ、四月に入ってからの日記は北海道でまとめて書いている。日記つまりメモも出来ないような暮しはイケない。それがわかっていながら時間が無い。時間を盗まれてしまっている。

開放系技術論、開放系デザイン論、磯崎新論、全てネットに流し始めてみようかと考えた。「塔」の現場の職人さんが私のウェブサイトをヒットする時代なのだ。さて、朝七時三〇分、ホテルの二階に降りて朝食をとろう。ゆっくりした一日でありますように。午前中、ヘレンケラー塔現場打合わせ。

十九時二十五分ＪＡＳ一五八便で帰京。その前に、十六時より雨山の小部敏一ログハウス訪問。良いオーディオの音を二時間程聴かせていただく。岩手一ノ関ベーシーの菅原昭二に久し振りにＴＥＬ。十勝に優れモノの音アリと伝える。菅原のベーシーの音は空前絶後のモノであるが雨山の小部サウンドも良く独力でここ

まで辿り着いたと感嘆した。音はまるでベーシーとは異なる。良い音の世界にはそれぞれの性格があることを学んだ。それにしても、わたしのオーディオサウンド初体験はベーシーの音であったのだから、その幸運には感謝しなくてはならない。

しかしながら、それぞれの径に、それぞれの達人がいることは嬉しいことだ。次に十勝を訪ねる時は雨山でゆっくり音を聴きながら過すつもり。良い二日間の北海道であった。

二十三時、世田谷村へ戻る。